

## ロシア語の čaj 「茶」の末尾要素 j について\*

柳沢 民雄

### The Final Element *j* of a Russian Word Čaj ‘tea’

Tamio YANAGISAWA

**要旨：**本稿はロシア語の語 čaj (чай)「茶」の末尾要素 j の起源について考察した。čaj の語源については、今まで村山七郎によってこの語の起源を中国語の č‘a<sup>2</sup>ye<sup>4</sup>「茶葉」であるとする説があった。本稿ではこの末尾要素の起源を中国語起源に求めるのではなく、ロシア語の構造から生じたものであると見なす説を提示した。

**キーワード：**ロシア語 čaj 「茶」 語源 末尾要素 j

#### 1. чай (čaj)の語源についての村山七郎説とその他の説

ロシア語の「茶」を表す чай (čaj)<sup>1</sup>の語源について、言語学者である村山七郎は1975年にこの語の起源は中国語の č‘a<sup>2</sup>ye<sup>4</sup>「茶葉」であるとする説を提出した。村山によれば、この語はモンゴル語で čai として受け取られ、これがさらに中央アジアのチュルク人を經由してロシア語に入ったというものである。村山はこの説を日本の雑誌に発表しているが<sup>2</sup>、学術論文としてこの説を発表したのは、ロシア（当時のソヴィエト）科学アカデミーの定期刊行物である *Этимология 1975*（『語源 1975』1977: 81-83）に掲載された、論文「ロシア語の語 чай の

<sup>1</sup> 本論での記号・略号の表記：(1)ロシア語の後ろの丸括弧のなかに書かれているのは学術的転写である。音韻的転写は本論では / / のなかに、音声転写は [ ] のなかに書かれる。形態素は { } のなかに書かれる。(2)転写において、子音の右上に書かれるアポストロフィはその子音が軟子音を表す。例：t’。一般に、当該の子音が軟子音と硬子音に対立している場合にのみその記号は記される。(3)【】の中の注釈は柳沢による。(4) C = consonant, ORuss. = Old Russian, PIE = Proto-Indo-European, PSl. = Proto-Slavic, Russ. = Russian, V = vowel, acc. = accusative, dat. = dative, f. = feminine, gen. = genitive, instr. = instrumental, loc. = locative, m. = masculine, nom. = nominative, pl. = plural, pres. = present, sg. = singular.

<sup>2</sup> 雑誌『月刊言語』やナウカ社の PR 誌である『窓 1975.3』に発表している。手元にないために詳細は不明であるが、『月刊言語』ではロシア語の чай の語源をめぐってウイグル語専門家と論争していたと記憶している。『窓』に発表したものは34-35頁に「茶」をあらわすロシア語の語源」という題目で書かれている。内容は *Этимология 1975* に発表したものをまとめたものである。その最後の箇所で村山は「私は日ソ学者交換で十二月初めから一九七五年一月末まで、訪ソすることになっているので、モスクワ、レニングラードおよびタシケントでロシア人やウズベク・トルコ人にこの説を紹介しようと考えている。将来、ロシア語語源辞典、トルコ語語源辞典にも採用されるのではなかろうか、などと空想をたくましくしている。」と書いて、独創性を強調している。

語源」である。学術誌に発表したことで、後にアメリカで出版された Orel (2011) 編の *Russian Etymological Dictionary* にも чай の項目に村山の論文が参考文献として載せられている。第 1 節では *Этимология 1975* に載せられた村山七郎の説を中心に、ロシア語の「茶」の語源がどのように語源辞典で取り扱われているのかを概観する。

### 1.1. ファスマーと村山七郎の「茶」の語源説

村山七郎は *Этимология 1975* の論文のなかで、著名なファスマー M. Vasmer の『ロシア語語源辞典』(Vasmer 1950-58) の説を紹介している。我々もファスマーの説をまず紹介しよう (ここでは O. H. Трубачев によって増補されたロシア語翻訳版 Фасмер 1986-87 を使った。内容は Vasmer (1950-1958) と同じ)。ファスマーによれば、

ロシア語の чай は北方中国語 čā 「茶」からトルコ語、クリミア・タタール語、タタール語、キリギス語、アルタイ語の čai 「茶」、ウイグル語 ча, モンゴル語 čai (Радлов 3, 1823, 1825; Рамстедт, KWb. 425) を通じてロシア語に入った<sup>3</sup>。一方、南方中国語の tē は西欧の「茶」の名称の起源になった: フランス語 thé, イタリア語 tè, 英語 tea. (Фасмер IV, 311).

村山はファスマーの説を *Этимология 1975* 誌の論文のなかで批判し、自説を次のように述べている (原文はロシア語で書かれている。ここでは本論と関係する部分を翻訳した):

ロシア語の最も良い語源辞典はマックス・ファスマーの辞典である。彼がかつて私に語ったことによれば、彼の先生はボドゥエン・デ・クルテネであった。彼の辞書のなかで、ロシア語の чай はチュルク語から借用されたと説明されている。彼はラドロフからチュルク語の čai (様々なチュルク諸語で) を引用し、ラムステットの『カルムイク語辞典』からモンゴル語の čai を付け加えている。ファスマーはラムステットと同様にチュルク・モンゴル語の語 čai は北方中国語の č'a に起源をもつものと考えている。12 世紀

<sup>3</sup> この Радлов の文献は原著 Vasmer (1950-1958) によれば, Wilhelm Radloff, Versuch eines Wörterbuches der Türkdiialekte, 4 Bde., Petersburg 1893-1911 である。また, Рамстедт, KWb. は, G. J. Ramstedt, Kalmückisches Wörterbuch, Helsinki, 1935 である。

Vasmer の『ロシア語語源辞典』(原著にもロシア語版にも) には, чай の項目に参考文献として, Littmann 133, MiTEL. 1, 271, Berneker EW. 1, 134, Kluge-Götze EW. 616, Lokotsch 33 が記載されている (不思議なことに, Vasmer の原著には Littmann の文献がどのようなものかの記載はない。これについてはロシア語版によって補った)。Littmann = E. Littmann, Morgenländische Wörter im Deutschen, 2. Aufl., Tübingen, 1924. MiTEL. = Fr. Miklosich, Die Türkischen Elemente in den südost- und osteuropäischen Sprachen I und II, Nachtrag I, II. DWA 34 (1884), 35 (1885), 38 (1890). Berneker EW. = Erich Berneker, Slavisches etymologisches Wörterbuch, A-Mor-, Heidelberg 1908-1913. Kluge-Götze EW. = Fr. Kluge, Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, 12.13. Aufl. von A. Götze, Berlin 1943. ところで, Lokotsch の文献は 1.3 において我々が言及する Lokotsch (1927) である。この文献に言及していることから, Vasmer はロシア語の чай が中国語の cha-ye ‘Teeblätter’ 「茶葉」に由来するとの説を知っていたことになる (これについては 1.3 を見よ)。村山は Lokotsch (1927) を見ていないために, чай の語源が「茶葉」に由来するという考えを自分の独創と考えている。

までのチュルク語の文献にはこの語は現れていない。『古代チュルク語辞典』【Древнетюркский словарь. Л., 1969 と注がある】は 12 世紀までの文献からの語を含めているが、この【茶という】語は入っていない。他方、我々は 13 世紀中葉に編纂された、中期モンゴル文献『Mongolun nyūča tobciyan』(『モンゴル人の秘密の物語』)において čai の語を見いだすことができない。私が知る限りにおいて、14 世紀に編纂された中期モンゴル語のグロッサリー『Hua-i yi-yü』のなかにもその語は見られない。このことは、čai という語がモンゴル語の語彙のなかにその当時欠けていたということを必ずしも意味するわけではないが、しかしモンゴル語のこの čai という語があまり古いものでないことは明らかである。

さて、チュルク語(ラドロフはまたウイグル語の ča も記しているが)とモンゴル語の čai は北方中国語の č'a<sup>2</sup>を基にして形成されたことは誰も疑うことはできないだろう。ハルハ・モンゴル語の tsai に関して、それは čai から発達したので、上海方言の tsa とはいかなる関係もない。

また、ロシア人はモンゴル人からではなくてチュルク人から чай の語を借用したということを誰も疑うことはできないだろう。チュルク人がその語をモンゴル人から借用したことは明かだ。というのはモンゴル人だけが北方中国人と直接に接触していたからである。

従って、なぜ北方中国語の č'a が čai に変わったのかの理由をもし我々が明らかにしたいのなら、このような借用がモンゴル語のなかでどのように変形されたのかを明らかにしなければならない。(中略)モンゴル学者の誰一人として中国語の č'a がモンゴル語の čai に変わった理由を明らかにしようとしなかった。しかし説明は非常に簡単である。今日、北中国では č'a が飲まれているが、食料品店で買うことができるのは č'a ではなくて、č'a<sup>2</sup>ye<sup>4</sup>「茶の葉」である。東モンゴル人が北方中国語の č'a を čai に変形した状況を考慮するためには、この日常の事実を考慮に入れなければならない。(中略)上で述べた中国語の語 č'a<sup>2</sup>ye<sup>4</sup>はモンゴル語のなかで変化したにちがいない。しかしいかなる方向においてか。この問いに答えるに際して考慮しなければならないのは、東モンゴル語の音韻的特徴である。ラムステットが記しているように【注として、G. Ramstedt. Das Schrift-Mongolisch und die Urga-Mundart Phonetisch Verglichen. — JSFOu XXI, 2, 1902, стр. 47. とある】、この音韻的特徴とは、ハルハ・モンゴル語と一般に東モンゴル語において非常に強いアクセントが第 1 音節の上にあるということである。このアクセントは後続音節の母音の弱めと弱化を引き起こす。もしこれを考慮すれば、なぜモンゴル人が中国語の č'a<sup>2</sup>ye<sup>4</sup>を čai に変形したかは明らかになろう。もし北方中国語の č'a<sup>2</sup>ye<sup>4</sup>がモンゴル人ではなくてチュルク人によって借用されたとすれば、チュルク人はそれを čayī に変形したであろう。いずれにしてもチュルク人は第 2 音節の母音を省略することをしないであろう。かくして、ロシア語の чай の語源は今明らかであると私には思われる。北方中国語の č'a<sup>2</sup>ye<sup>4</sup>「茶の葉」はモンゴル人によって čai に変形された。一方、この形はチュルク人によって借用され、彼らはロシア人にそれを伝えたのである。中国語の「葉」は古代中国語から

(yer の形で) 日本語に借用された。日本語では yer > yew > yeu > yo: と変化した。現代北方中国語の č'a<sup>2</sup>ye<sup>4</sup> は、現代日本語で čayo:【茶葉】に一致する。日本人はこの語の意味を理解するが、現代口語ではそれは廃れている。日本でロシア語を学んでいる学者や学生は、ロシア語の чай が漢語の čayo: と同じものであるとは気づかない<sup>4</sup>。従って、ロシア語の чай は、モンゴル語を媒介にして中国語の č'a<sup>2</sup>ye<sup>4</sup> に遡るのであり、本来的には茶ではなくて茶の葉を意味したとみなすと説明がつくと私は考えるのである。著名な支那学の小川環樹教授は私に北方中国では č'a でなく、č'a-ye が売買されていると指摘してくださった。この指摘がもしなければ私の語源解釈はなかったであろう。小川教授に感謝の意を表したい。(Мураяма 1977: 81-83)

## 1.2. プレオブラジェーンスキーとチェルヌウイフの「茶」の語源解釈

ロシア語の語源辞典からロシア語の чай がどう扱われているかを見ていこう。まず、プレオブラジェーンスキー Преображенский の『ロシア語語源辞典』(1910-1914)はつぎのように書いている：

ウクライナ語 чай. スロヴェニア語 čaj. セルボ・クロアチア語 чај. チェコ語 čaj. ポーランド語 czaj — これらすべてロシア語から。 — 中国語の 茶「茶」から借用。Berneker によれば (BEW. 134【BEW.= *Slavisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg. 1908. Lieferung 1, 2, 3, 4】) チュルク語を媒介にした [どのようなチュルク語か]。[興味深いことに、西欧で同じ起源から、つまり中国語起源から、フランス語 thé, オランダ語 thee, 英語 tea, ドイツ語 thee が現れている。これは中国の様々な地域で тэ, ча, ця と発音されていることによる。Skeat, ED. 544 参照。【Skeat ED.= *A concise etymological dictionary of the English language*. New re-written and re-arranged. Oxford. 1901】

プレオブラジェーンスキーの辞書には特別なことは書かれていないが、ウクライナ語からポーランド語におけるスラヴ語の「茶」の語 (いずれも末尾に -j を有する) が全てロシア語からの借用であると書かれていることが注目される。つぎにチェルヌウイフの『現代ロシア語の歴史・語源辞典』(Черных 1993)の чай の項を見てみよう。なおこの語源辞典についてつぎのことに留意する必要がある。著者のチェルヌウイフは優れたロシア語史の専門家であり、後に触れるような優れたロシア語史の本を書いている。この語源辞典も例外ではないが、著者は 1970 年にこの辞典の手稿を残して死去している。後にこれを編集して 1993 年に 2 巻本として出版されたのであるが、編集者がこれをどのように編集したかはこの辞書の初めにつぎのように書かれている：「著者は А から Я までの辞書の全ての手稿を出版所に提出した。

<sup>4</sup> 学術論文であるのにも拘わらず、村山は論文の主旨から外れ、日本のロシア語学者やロシア語を学んでいる学生を揶揄している。また、村山は、「彼【ファスマー】がかつて私に語ったことによれば、彼の先生はボドゥエン・デ・クルテネであった」(Мураяма *ibid.* 81), と書いている。これも論文の主旨から外れた余計なことである。村山はファスマーと知り合いであったことを言いたいようであり、それによって自分の論文の価値を高めようとしている。

(中略) 辞書の手稿の編集にさいして、編集者は著者の資料にいかなる建設的な変更ももたらさなかった。辞書の語彙項目、辞書論文の構造、他ならぬ語の語源は著者が与えた姿のままに保持した。」(ibid. p.3) 従って、村山七郎説はこの辞典には当然反映されていない。チェルヌウイフの辞書の чай の項は2段組でおおよそ半頁を占める。文字はかなり細かく多くの情報が詰まっている。本論と関連のある部分のみここに翻訳する(波線は柳沢による)：

ロシア語で чай という語が使われたのは17世紀中葉からである。しかも初めのうちは恐らく薬草名として使われた。例えば、МИМ【МИМ=Материалы для истории медицины в России「ロシアにおける医療史資料」. Спб., 1881-1885, вып. 1-4】で：«травы чаю; цвета рамонова (?) — по 3 горсти» (в.2, № 365, 1665 г., 291), «вареное чаге (恐らく, чајеあるいは чаге) листу хинского (誤植：ханского)» (в. 3, № 1055, 1665 г., 788). ◇ 直接に中国語から借用された、と見なさねばならない(17世紀の第2半期にはモスクワ国と中華帝国との強固な結びつきがすでに確立された。ロシア語の чай は中国語の ча : чае に遡る(чаは「飲み物の茶」、чаеは「茶の葉」、чашуは「草木の茶」；比較せよ：また хэ ча は「茶を飲む」、хэчаは「喫茶」、чагуаньは「喫茶店」、等)。チュルク諸語[トルコ語 çay; アゼルバイジャン語 чай (caj); ウズベク語 чой, 等]の媒介を全く仮定しなくてもよい。この語は広く東洋に行き渡っていた。比較せよ：ヒンディー語 चाय; アフガン語 چای, 等；近東で：ペルシャ語 чай (tjai)。一方、モンゴル語 цай; ブリヤート語 сай; 日本語 (о)тя。

この最初の例, травы чаю は「茶の薬草(травы)」という意味であろう。чаю (čaju)は чай (čaj) の -u で終わる単数属格(生格)であり、物質や集合的な意味の名詞に使われる現代にも残る用法である<sup>5</sup>。по 3 горсти は「3つかみずつ」と読める。цвета рамонова についてはチェルヌウイフ自身も不明とするが、何かの色(цвет)についての記述と思われる。つぎの例, вареное чаге は最も問題になる箇所である。チェルヌウイフが指摘するように, чаге (čage) が「чајеあるいは чаге」とするならば, чаге (čage) は中国語から直接に借用された чае (čaje)「茶の葉」の変形された形、つまり本来 j をもっていた形(村山の č'a²ye⁴ 参照)の j が g に変化し、母音間でその閉鎖音 g が摩擦音 γ に変化した形としてみなすことができるかもしれない<sup>6</sup>。従って、チェルヌウイフに従うならば, вареное чаге は「煮立った(вареное)茶の葉」という意味の単数主格(=対格)・中性であろう。листу хинского はチェルヌウイフの説をとれば、「汗(хан)の葉の」(単数属格)という意味となる。チェルヌウイフの茶の語源説は多くの点で興味深い。まず、17世紀のロシア語には中国語の「茶葉」が直接に借用されていたと見なすべき証拠がある：чаге において末尾母音は消滅されずに残っている。従って、村山七郎説のよ

<sup>5</sup> この時代の用法については Черных 1953: 260ff.を見よ。

<sup>6</sup> あるいは、ロシア語の南ロシア方言では有声軟口蓋音は摩擦音の[γ]として発音されるので(標準ロシア語では[g]), čage は [čaγa] と発音されていたのかもしれない。さらに標準ロシア語の宗教語のなかにこの発音が残っていることも参照：gen.sg. Бога (Boga) [bóγa], cf. nom.sg. Бог (Bog) [box]「神」、господь (gospód') [γ-]「主、神」。

うにモンゴル人からチュルク人経由の借用の途筋を立てる必要はない。しかしチェルヌウイフは、現代ロシア語 чай「①(飲み物の)茶；②茶の葉」の語源について中国語の ча「(飲み物の)茶」に（また чае「茶の葉」に）遡るとしか述べていない。直接に中華帝国から ча がロシア語に借用されたとしても（その可能性は高い）、ロシア語の чай の末尾の й (j) はどこから由来するのかについてチェルヌウイフは何も述べていない。また、チェルヌウイフはここで中国語の「茶の葉 чае」について村山七郎よりも早く指摘している。チェルヌウイフの辞典のこの項には文献が挙げられていないので、「茶の葉」の正確な出典は分からないが、後述するようにその出典はおおよそ推定できる。

### 1.3. その他の語源辞典の「茶」の解釈

上の語源辞典はロシア語の語源辞典であったが、今度は同じスラヴ語に属する語源辞典から「茶」がいかに解釈されているかを見てみよう。スラヴ諸語のなかで最も優れている辞典の一つである、『クロアチア語あるいはセルビア語語源辞典』(Skok 1971-1974)では、セルボ・クロアチア語の čaj「茶」はつぎのように記されている（本論と関係する箇所を引用し、拙訳を付けた）：

čaj m = čaj pored čaj ... . Dočetno -j je ostatak od kineske riječi ye »listovi«. Prema tome je čaj kineska složenica ča-ye »čajni listovi«. (ibid. T. 1, 1971: 288)

čaj 男性 = čaj の他に čaj 【ä と â はそれぞれ音調が下降短と下降長の母音を表す】... 末尾要素 -j は中国語の語 ye「葉」の残滓である。それ故、čaj は中国語の合成語 ča-ye「茶の葉」である。

ここには「茶」の末尾の-j の語源が中国語の「茶の葉」の-ye「葉」に遡ることが書かれている。この茶の語彙項目には参考文献として8つの文献が挙げられている。私はその中から čaj が合成語 ča-ye「茶の葉 (Teeblätter)」に遡るとする説の文献の1つを見つけることができた。それは、Lokotsch (1927: 33)であり、つぎのように書かれている：

415. Chin. cha: 'Tee'; cha-ye 'Teeblätter' [so ist die Aussprache im Kuan-hoa, s. hier Nr. 1400, und im Kantondialekt]; hieraus pg. [pg.=portugiesisch] chà, sp. [sp.=spanisch] (selten) cha, russ. čai, bulg. čaj, serb. čaj, šej, čech. čaj, poln. czajnik ('Teekanne'), czaj. ...

415. 中国語 cha:「茶」; cha-ye「茶の葉」[その発音はクアン・ホアで(これについて Nr.1400 参照) また広東方言でもそうである]; ここからポルトガル語 chà, スペイン語 (稀に) cha, ロシア語 čai, ブルガリア語 čaj, セルビア語 čaj, šej, チェコ語 čaj, ポーランド語 czajnik (「急須」), czaj. ...

そこにはさらに参考文献が載せられているが、もうこれ以上ここでの議論に必要なだろう。村山が自身のオリジナルな発見であるとして発表した、ロシア語の語 чай が中国語の「茶葉」に由来するとの説はかなり古くから知られていた説であるということである。チェルヌウイ

フの語源辞典の参考文献にはこの Lokotsch の語源辞典が記載されているので、チェルヌウイフはこれを参考にしたのであろう（ここに Skok の語源辞典は記載されていない）。

以上検討したように、ロシア語の чай の語源についてチェルヌウイフの説は最も信頼できるものである。彼の説をまとめれば、(1)ロシア語の чай は中国語の ча「飲み物の茶」あるいは чае「茶の葉」に遡る。(2)中国語の чае (あるいは čaye)「茶の葉」はロシア語で чаге (恐らく, чајеあるいは чаге) として現れている。しかし依然として、ロシア語の чай の末尾要素 -й (-j) の由来は不明のままである。次の節では、この末尾要素の起源を探究するための前提となる、ロシア語の構造と外来語の取り扱いについて検討する。

## 2. ロシア語の形態構造と外来語の特徴

村山七郎および Lokotsch らの説は、чай の末尾要素の -й (j) を中国語の čaye「茶葉」の -y (-ye)（我々の表記では -j (-je)）に由来するという考えであった。これは謂わば、ロシア語のある語（要素）をロシア語以外の X 語に直接起源を求めるという考え方である。しかしこういったやり方での語源探しはかなり危うい方法論に基づいていると言わざるを得ない。例えば、ロシア語で「横浜」は Йокогама (Jokogama) と言われる<sup>7</sup>。これはロシア語には h の音素がないために、ロシア人はこれに г (g) の音を当てるためである。しかしもし Йокогама の語が X 語の g を媒介にしてロシア語に入ったと考え、この X 語を探す人がいたとすれば、我々はそういうことをする人は間違っていると気づくのである。なぜ我々はそれに気づくのかといえば、ロシア語の音韻体系を知っているからであり、また他の言語で h 音をもつ語がロシア語で г (g) の音に相当する例を多く知っているからである（例えば, гимн (gimn)「賛歌」: ドイツ語 Hymne; гипотеза (gipot'eza)「仮説」: ラテン語 hypothesis; Гамлет (Gamlet)「ハムレット」: 英語 Hamlet; гектар (gektar)「ヘクトール」: フランス語 hectare)。これをここでのロシア語の чай の語源に結びつけば、上で чай の語源説を主張していた人達は、ロシア語の г (g) の音を外部の X 語に起源を求める人に似ている。この例から我々が得ることができる教訓は、ある Y 語の語源を外部の X 語に求める前に、その Y 語がある語を借用した時代の音韻や形態の構造を調査し、Y 語が別な言語から語を借用するさいにはどのような変形が行われるかをまず調べる必要があるであろう。

以下ではまず、本論と関連する現代ロシア語の形態的構造と外来語の特徴を述べ、その後にロシア語に чай が借用されたとされる 17 世紀頃の、ロシア語に借用された外来語の特徴を述べる。これらの後にロシア語の「茶」を表す чай の末尾要素 -j がロシア語の内部的な構造規則から生じたとの仮説を提示しよう。

### 2.1. 現代ロシア語の形態構造と外来語の特徴

ロシア語の語根構造は大きく 3 つのタイプがある<sup>8</sup>。名詞、動詞そして代名詞タイプである（本論と関係ない動詞と代名詞のタイプは省略する）。名詞タイプは xVC（V=母音, C=子

<sup>7</sup> Йокохама (Jokokhama) とも言われる。

<sup>8</sup> 現代ロシア語の語根構造については, Garde (1981 [2006: 69-72]) を参照。またギャルド著『ロシア語文法』の訳注 86 (p. 564f.) を参照。

音, x=任意の語頭要素) であり, 最小語根は VC である: ум (um) {um-ø} (ø は男性名詞・単数主格の屈折語尾)「知性」, ив-а {iv-a}「柳」(a は女性名詞・単数主格の屈折語尾). CVC: лес (l'es) {l'es-ø}「森」, рук-а {ruk-a}「手, 腕」. CVCVC: лебедь (l'eb'ed') {l'eb'ed'-ø}「白鳥」, голов-а {galov-a}「頭」. 移動母音(#)は語根の最後の母音位置でのみ現れることができる<sup>9</sup>: C#C: nom.sg. пёс (p'os) {p'os-ø}「犬」~ gen.sg. пс-а (ps-a) {p#s-a}(a は男性名詞・単数属格の屈折語尾); CVCC#C: nom. sg. сестр-а (s'estr-a) {s'est#r-a}「姉妹」~ gen.pl. сестёр (s'est'or) {s'est'or-ø}(ø は女性名詞・複数属格の屈折語尾).

現代ロシア語には例外的に語根が CC(まれには CCC)をもつものが若干存在する. 例えば, тьм-а (t'm-a)「闇」, рж-а (rž-a)「鏝」. これらの例はいずれも歴史的に子音間に弱化母音 ь (ĭ), ъ (ŭ)をもっていた語根であり, 弱化母音消失の結果 CC 語根になったものである: ORuss. тьма (tĭma) > тьма (t'ma), ORuss. рѣжа (rĕža) > ржа (rža). 上の名詞語根の例外として, 極めて少数の外来語に語根が CV のものがある. 例えば, па (pá)「(ダンスの)ステップ」や фа (fá)「(音階の)ファ」. こういった外来語は語形変化しない. これらのことから次のことが分かる: ロシア語の名詞には語根が C のみをもつ語は存在しない. また, ロシア語の CV 語根をもつ普通名詞は語形変化しない.

ロシア語の語尾は以下の特徴をもつ<sup>10</sup>: (1) CVC 群は存在しない. (2) 子音群はない. (3) 音韻構造の観点から語尾は (ゼロ語尾を除き) 4 つのグループに分けられる. その 2 つは一般的タイプ, 他の 2 つは特殊タイプ (特殊タイプは動詞タイプと代名詞タイプであるので本論との関連でここでは省略する). 一般的タイプ(a)は V(CV)である. V: зим-а {z'im-a}(a は女性名詞・単数主格の屈折語尾)「冬」; VC: лес-ом {l'es-om} (om は男性名詞・単数具格の屈折語尾)「森によって」; VCV: лес-ами {l'es-am'i} (am'i は複数具格の屈折語尾)「森林によって」. 一般的タイプ(b)は#CV であり, 名詞については 2 つの語尾に見られる. -ю (-ju): костью (kost'ju) {kost'-#ju} (#ju は第 3 曲用・単数具格の屈折語尾)「骨によって」; -м'и: детьми (d'et'm'i) {d'et'-#m'i} (#m'i は複数具格の屈折語尾)「子どもたちによって」. これが移動母音をもつ#CV

<sup>9</sup> 移動母音(беглый гласный)とは, 形態素が 2 つの交替形(ゼロ母音をもつ形と母音をもつ形)を示すさいに出没する母音をいう(我が国のロシア語文法はこの母音を「出没母音」ともいう). この母音が現れるときの母音は基本的に /o/ と /e/ である(母音の選択は単純な規則によって決まっている). 出没する条件は, 語末が-CC に終わるとき母音がこの子音の間に現れ, 語末が-CCV に終わるときこの子音の間に母音は現れない. ある形態素における移動母音の存在は, この形態素の属性の 1 つであるので, これをロシア語学では通常, #の記号を使い, この形態素を{-C#C}のように書く. この現象はある形態素にのみみられるもので, 語末が-CC で終わっていても移動母音は現れない例も多くある: 例えば, ритм (r'itm)「リズム」. 2 つの子音で終わる語幹のうちで, 何がこれら 2 つの子音のなかに移動母音を挿入するものなのか, あるいは何がそこに移動母音を挿入しないものなのかを明確にする規則を定めることは不可能である. しかし上の ритм の例のような最近の借用語は決して移動母音をもたない. 本論との関係で言えば, 語根に移動母音#があるときは, 基本的に#は母音 V と同じ扱いを受けているということである. 上の例の gen. sg. пс-а (ps-a) についていえば, この語根形態素は{C#C}であるので, 名詞タイプ xVC とみなすことができる.

<sup>10</sup> 現代ロシア語の語尾の構造については, Garde (1981 [2006: 74-76])を参照. またギャルド著『ロシア語文法』の訳注 85 (p. 564)参照.



語尾であることは、これらの形の複数属格形によって分かる：костей (kost'ej) {kost'-ejø}, детей (d'et'ej) {d'et'-ejø}. いずれも#CVの末尾母音はゼロであり、このために移動母音/e/が子音間に現れている。

語根の中で **2つの母音が連続**しているのは外来語の特徴。例：аорта (aorta)「大動脈」, поэт(poet)「詩人」, гяур (g'aur)「邪教徒」, баобаб (baobab)「バオバブ」, радио (rad'io)「ラジオ」, боа (boa)「ボア(大蛇)」, пауза (pauza)「中断」, джоуль (džoul')「ジュール(単位)」, 等。ロシア語起源の語においてはこのような語根のなかの母音連続はかなりまれである(全部で4語)：паук (pauk)「蜘蛛」, каурый (kaurij)「薄栗毛色の」など。ロシア語で母音連続が起こる場合は、次の形態素の境界である：(1) 接頭辞と語根の境界：на-ука (na-uka)「科学, 学問」, за-играть (za-igrat')「遊び始める」, 等。(2) 複合語の2つの語の境界：само-убийство (samo-ub'ijstvo)「自殺」, одно-образно (odno-obrazno)「単調に」。

**名詞の外来語**は次の特徴をもつとき不変化である。つまり全ての数と格において同じ形をもつ。

- (1) /a/以外の母音で終わる語：/e/: кофе (kof'e)「コーヒー」, кафе (kafe)「カフェ」, кашне (kašne)「スカーフ」, каное (kanoe)「カヌー」, шимпанзе (šimpanze)「チンパンジー」, 等。/i/: виски (v'iski)「ウイスキー」, шасси (šas's'i)「(自動車の)シャーシ」, 等。/o/: метро (m'etro)「地下鉄」, пальто (pal'to)「外套」, кино (kino)「映画」, депо (depo)「機関庫」, го (go)「碁」, 等。/u/: меню (m'en'u)「メニュー」, интервью (interv'ju)「インタビュー」, рандеву (randevu)「ランデブー」, 等。

- (2) /a/で終わっている語のなかで以下の特徴をもつ語：

1. /a/が母音によって先行されている語：амплуа (amplua)「役柄」, буржуа (buržua)「ブルジョア」, патуа (patua)「(フランス語の)訛り」, боа (boa)「ボア(大蛇)」, 等。
2. 子音の後ろの/a/がアクセントをもつ若干の語：па (pá)「(ダンスの)ステップ」, антраша (antrašá)「(バレエの)アントルシャ」, бра (brá)「壁につけた燭台」, альпака (al'paká)「アルパカ」, фа (fá)「(音階の)ファ」, ша (šá)「文字 ш の名称」。

その他の/a/で終わる多音節の外国起源の普通名詞は、第1曲用に基づいて語形変化する。例えば, машина (mašina) {mašin-a}「車」, gen.sg. машины (mašini) {mašin-i} ; хонда (xónda)「(自動車・バイクの)ホンダ」, gen.sg. хонды (xóndi). これらの語はいずれも末尾のaを語尾とみなして語形変化する。それに対して, /a/で終わる1音節語は語形変化するしない。上の例の па (pá)のように, このaを語尾とみなして変化することはできない。これは, 上で述べたように1つの子音だけの語根は名詞には存在しえないからである。

- (3) 子音で終わっている語のなかで女性を指し示す語：мадам (madam)「マダム」, мисс (miss [mis])「ミス(未婚婦人)」, Лилиан (L'il'ian)「リリアン」, 等。

上の(3)以外の子音で終わる外国起源の普通名詞や名前は、第2曲用にしながら語形変化する男性名詞である：франк (frank) {frank-ø}「フランク人 ; (貨幣の単位)フラン」, gen.sg. франка (franka) {frank-a}。

## 2.2. 17世紀ごろのロシア語における外来語の取り扱い

чай が借用されたと考えられる、17 世紀ごろのモスクワのロシア語は古代ロシア語とは違って、現代ロシア語に繋がるロシア共通民族語の発生の時代のロシア語である。Черных (1953:185)は『1649 年の法典の言語』の中でこの時代のロシア語についてこう書いている：

この『法典』の資料によるモスクワの言語の音声と形態に関するコメントに取りかかるまえに、現代ロシア語と 16-17 世紀のロシア語の間の関係についての問題を方言的観点から言及しなければならない。現代ロシア語と 17 世紀初めばかりでなく 16 世紀末のロシア語の間には、地方方言の類型の意味でも、これらの方言の普及の意味でも本質的な違いはないと見なすことができる。(ibid. 185)

勿論、17 世紀ごろのロシア語の形態法は現代ロシア語の形態法と異なる点がみられる。しかし本論で議論している語根構造や語尾の構造の点では、基本的に上で述べた現代ロシア語と同じとみなしうる。例えば、『1649 年の法典の言語』の名詞曲用のパラダイムを Черных (ibid. 259)から示せば、それが現代ロシア語の形態法にもう一步のところ近づいていることが分かる。例えば、『1649 年の法典の言語』における городъ (górodъ)「都市」のパラダイム：

sg. nom. górodъ, gen. góroda, dat. górodu, acc. górodъ, instr. górodomъ, loc. górodě;  
pl. nom. górodi, gen. gorodónъ, dat. gorodómъ (dvorámъ), acc. górodi, instr. górodi, loc. goroděхъ (dvoráхъ)

と現代ロシア語のパラダイムを比較せよ：

sg. nom. górod, gen. góroda, dat. górodu, acc. górod, instr. górodom, loc. górode;  
pl. nom. gorodá, gen. gorodón, dat. gorodám, acc. gorodá, instr. gorodámi, loc. gorodáx.

『1649 年の法典の言語』における、語末の弱化母音由来の文字 ъはこの時代には発音されていない。現代語との大きな違いは複数主格形と与格、具格(造格)と位格(前置格)の語尾である。現代語の複数主格＝対格形の gorodá はこの後すぐに発達した形態である(20 世紀まで続く生産的な男性名詞・複数の -á 形)。与格と位格(前置格)の語尾は、すでに現代語と同じ語尾 -am, -ax のヴァリエーションが現れている。最も異なる複数具格(造格)形 górodi はこの後に、女性名詞の複数具格(造格)の語尾 -ami (cf. žena, instr. pl. ženami)を取り入れ、複数形において語尾の形態を統一する(現代ロシア語では gorodámi)。さらにアクセント・パラダイムも現代語に基本的に類似している：単数での語頭アクセント～複数での語尾アクセントの対立。ここには 2.1 で述べた現代ロシア語と同じ、語根と語尾の構造がみられる：名詞語根は CVCVC であり、語尾は V(C)である。

我々が問題とする名詞の**外来語**は 17 世紀ごろにはどのような特徴をもっていたのであろうか。最も興味深いことは、この当時の外来語は現代語で不変化の名詞でも語形変化する語が見られることである。例として, кофе (kof'e)「コーヒー(コーヒーの木と飲み物の意味をもつ)」を取り上げてみよう。チェルヌウイフの『現代ロシア語の歴史・語源辞典』(Черных 1993

I, 436) によれば, кофе の語が辞書のなかで記されたのは 1762 年からであるが, 使われ出したのはピョートル時代からである(кофе, кафе, より頻繁には кофий, кофей の形で使われた). チェルヌウイフは次のように書いている:

例えば, Куракин の『アルヒーフ』(I, 120, 1705 年)では: «пьют и чай и кофе»「お茶もコーヒーも彼らは飲む」; кофий は 1724 年の『モスクワの税率規約』で: «в кофейной ящик для кофи и чаю»「コーヒーとお茶用のコーヒー箱の中へ」. ときには кафе (ИКИ, 1733; 1734). (中略)ロシア語の「コーヒー」は恐らく, オランダ語 koffie に起源をもつだろう<sup>11</sup>.

ここで注目すべきことは, кофе の語には -й で終わるヴァリエント кофий, кофей があることである(こちらの形のほうが頻度が高いことに注意).

次にこの語の歴史的な変遷をたどってみよう. まず, 18 世紀の語彙 4 万 3 千語以上を含むとされる, 1789-1794 年に出版された『ロシア・アカデミー辞典』(Словарь Академии Российской)の「コーヒー」の項目は次のようである:

**КОФЕЙ**, фея. с. м. Coffea Arabica. 1) Бобки различной величины, овальные, ... 2) Напиток сваренный из жженных и смолотых бобков кофейных. Варить кофей. Пить кофе, кофей. (ibid. III. 882)

この辞書には кофе の項目はなく, кофей の項目しかない. この語は単数属格(生格)が кофей と変化することが書かれている. すなわち, kofej-a (=кофей)と通常 of 男性名詞として語形変化する. 本文はコーヒー豆の起源や薬効や飲み方などが書かれ, 最後に用例(イタリック体の箇所)が出ている. 最初の例は「コーヒーを入れる」という意味で кофей の対格形, 次の例は「コーヒーを飲む」という意味で кофе, кофей の 2 つの対格形が出ている.

次にプーシキン А. С. Пушкин (1799-1837)の作品に現れる кофей (кофий)と кофе の頻度を観察してみよう. ソ連邦科学アカデミー編の『プーシキンの言語辞典』(Словарь языка Пушкина 1956-1961)によれば, プーシキンの全著作のなかで кофей (кофий)は 13 例, кофе は 5 例が現れている. 前者は以下の語形で現れる(数字は現れる回数): nom.sg. кофей (1), gen.sg. кофию (5), кофеею (1), acc.sg. кофей (6). 後者は кофе のみの語形で現れる. 例えば, 『エヴゲーニー・オネーギン』(1823-32)のなかに現れている単数対格 кофей:

Здесь почивал он, кофей кушал,  
Приказчика доклады слушал  
И книжку поутру читал... (VII 18.5-7)

<sup>11</sup> ファスマーの語源辞典(Фасмер, II. 355)によれば, このロシア語の語は英語の coffee あるいはオランダ語の koffie (= kófi)から借用したと記されている.

ここで彼はお眠りになり、コーヒーを召し上がり、  
管理人の報告をお聞きになり、  
そして毎朝本をお読みでした...

さらに単数属格の例：Проезжий не спрашивал себе ни чаю, ни *кофию*, ... (Дубровский) 「旅人はお茶もコーヒーもくれと言わなかった」。一方、『エヴゲーニー・オネーギン』のなかの単数対格(男性)形で現れている кофе の例：

Потом свой *кофе* выпивал,  
Плохой журнал перебирая, (IV 36/37.11-12)  
そのあと【エヴゲーニーは】自分用のコーヒーを飲むのだった、  
くだらぬ雑誌を次々に手に取って、

プーシキンは、数の上では кофей (кофий) のほうを多く用いていることが注目される。

次に、1867 年出版の帝国科学アカデミーの『教会スラヴ語とロシア語辞典』(2 版) (Словарь церковно-славянского и русского языка. СПб.) では、「**Кóфе**, и **Кóфей**, я, ...」と第 1 番目に кофе が出ている。単数属格形を表す я は кофей だけに当てはまる (つまり кофейя)。さらに有名なダーリ В. Даль の『生きた大ロシア語詳解辞典』(Толковый словарь живого великорусского языка. 1912) (ボドゥエン・デ・クルテネによる改訂 4 版) の「コーヒー」の項目には「**Кóфе** нескл., **кóфей** м. ...」と出ている。すなわち、кофе は不変化であり、кофей (また кофе も) は男性名詞であることを表している。最後に革命後に出版されたウシャコフ(Ушаков)編纂の『ロシア語詳解辞典』(Толковый словарь русского языка. 1. 1935) の「コーヒー」の項目は кофе と кофей が別項目に立てられており、

**КО'ФЕ**, нескл., м. и (разг.) ср. ...,

**КО'ФЕЙ**, я, мн. нет, м. (простореч.). Кофе. Здесь почивал он, к. кушал. Пшкн. ...

と書かれている。すなわち、кофе は「不変化で男性名詞、また口語では中性名詞」、кофей は「単数属格形で кóфейя、複数はない、男性名詞(俗語)」とされ、上で挙げたプーシキンからの用例が載っている。ここですでに кофей は俗語として、кофе が標準になっていることは注目される。最新のロシア語辞典(Ожегов и Шведова 2009)には кофей の項目はない。これらの例から、кофей の語は次第に衰退し、代わりに不変化の кофе が標準になったことが分かる<sup>12</sup>。

<sup>12</sup> 現代語において кофе が中性名詞ではなくて、男性名詞であることはこのような理由による。

この「コーヒー」の語について、ブラホーフスキー Булаховский (1954: 81) が『19世紀前半のロシア文章語』の「外来語と固有名詞の曲用について」のなかで触れている。彼はつぎのように書いている：

今日では語形変化しない、外国語から借用された一連の語（主に男性と中性）は、19世紀前半のある作家達の場合には語形変化している。それらの語のうちの多くは、しかるべき形によって変化する単数主格形をもっていた。（中略）広く用いられるのは様々な格での кофий の形である：例えば、以下を比較せよ：

„Сегодня я, Прасковья Осиповна, не буду пить кофию“, сказал Иван Яковлевич (Гоголь, Нос, 1836)

「プラスコーヴィヤ・オーシポヴナ<sup>13</sup>、今日はコーヒーを飲まないことにしよう」とイヴァン・ヤーコヴレヴィッチが言った（ゴーゴリ『鼻』1836）。

ここではゴーゴリの『鼻』から -u 語尾 (кофию /kofij-u/) の否定属格(生格)の例が挙げられている。ブラホーフスキーのこの箇所には、「コーヒー」の語以外に現代語では不変化の名詞が語形変化する例として、その若干が挙げられている。例えば, алой (aloj)「アロエ」（現代語は алоэ (alóe)で不変化), instr.sg. алоем (alojem) 1839. бюро (b'uro)「事務机」(現代語では不変化), loc.sg. На бюро, ..., лежало множество всякой всячины「事務机の上に多くのありとあらゆるものがあつた」(Гоголь, Мартв. души, 1842). мадам (madam)「マダム, 夫人(上で述べたように現代語では不変化)」, gen.pl. мадамов (madamov) 1807, instr.sg. с мадамой (s madamoj)「マダムとともに」1824. фортепиано (fortepiano)「ピアノ」(現代語では不変化), gen.sg. звуками фортепиано (fortepiana)「ピアノの音によって」1830, loc.sg. играла на фортепиано (fortepiane)「ピアノを演奏する」1834. (ブラホーフスキーの注：一連の作家は不変化のままである)。

ブラホーフスキーの挙げている例は、チェルヌウイフの語源辞典ではいずれも次のように出ている（мадам と фортепиано (фортепiano) の項目はファスマーの語源辞典による）。

**бюро**：ロシア語で бюро の語が広く使われるのは18世紀中葉から、しかし初めは「一種の書き物机」の意味で。例えば、1765年のメモで：«сидя за своим бюро, читал»「事務机に向かつて座つて読んでいた」。ときには変化形もみられる：«против бюро» (1801)「事務机の向かいに」。借用の源はフランス語 bureau.

**алоэ**：不変化, 中性 (廃語 алой, -я 男性). 仏 aloès, *m.*; 独 Aloe, *f.*; 蘭 aloë; 英 植物 aloe, しかし医療 aloes, *pl.* 本源はギリシャ語 ἀλόη, *f.*, ここから後期ラテン語 aloe. (...) スラヴ地域ではこのギリシャ語は алóй の形で昔の時代から知られていた。後にこの語は再度借用された。今度は西洋からで, алóэ の形で借用されたが, алóй とおなじように o の上

<sup>13</sup> 奥方に名と父称を使うのは19世紀に見られる風習。

にアクセントをもって、借用源をドイツ語と考える必要は全くない。モスクワの医師のなかにはドイツ人以外の他の外人、英国人やオランダ人他がかなりいたからだ。

**мадам:** 不変化。古形は мада́ма (Грибоедов)。ピョートル 1 世の時代から。

**фортепьяно:** また фортепьян 男性(例えば、チェーホフで)。古い新高地ドイツ語 Fortepiano (しばしば 1775 年から)あるいは直接にイタリア語 *fortepiano* を経由して。男性形は恐らくポーランド語 *fortepian* を経由して。

以上で述べたことから、17 世紀から 19 世紀前半までのロシア語に入った一部の外来語が本来のロシア語と同じように語形変化していたことが確かめられた。時代を遡るほど語形変化する傾向がある。その後これらの外来語の名詞(中性名詞)は不変化になっていく。現代まで続くこの流れはロシア語の特徴である。

### 3. ロシア語の чай の末尾要素 -j はどこから来たか

上で述べたことから次のことを指定することができる。

- (1) ロシア語の名詞語根は xVC の構造をしている<sup>14</sup>。
- (2) ロシア語の名詞タイプの語尾は V(CV) 構造をしている。
- (3) ロシア語の名詞語根は C であることを許さない。
- (4) ロシア語は語根内部に 2 つの母音を連続させることを嫌う。
- (5) 17 世紀ごろ (あるいは 18 世紀から 19 世紀前半まで) にロシア語に入った一部の外来語は語形変化する (歴史を遡るほど語形変化する傾向がある)<sup>15</sup>。
- (6) 上の(1)と(2)から、名詞が接尾辞なしに語根と語尾を結合するさいには、xVC-V(CV)の構造になる。
- (7) (6)から次の条件が出てくる: 「語根+語尾」の結合のさいに、母音連続は許されない。

<sup>14</sup> 「ロシア語の名詞語根が CV であるときには語形変化しない」という条件は現代ロシア語に適用される。現代ロシア語の例, па (pá)「(ダンスの)ステップ」や фа (fá)「(音階の)ファ」はかなり特殊な例である。これ以外の例は文字の名称以外にないと思われる。文字の名称や音階の「ファ」を語形変化させることはありそうもない (なおロシア語の音階名称 до, ре, ми, фа, соль, ля, си「ドレミファソラシ」の語はすべて不変化)。

<sup>15</sup> 現代ロシア語の外来語である中性の語, 例えば, шоссе (šossé)「街道」, метро (m'etró)「地下鉄」, пальто (pal'tó)「外套」, кафе (kafé)「軽食堂」, кино (kinó)「映画」, интервью (interv'jú)「インタビュー」, меню (m'en'ú)「メニュー」, виски (v'iski)「ウイスキー」, депо (depó)「機関庫」などの不変化語は、末尾に -j を付加することはない。この理由は、恐らく、これらの語が借用された年代が比較的新しく、多くは 19 世紀中葉以後にロシア語に借用されたためであろう(他方, кофей (кофий)は 18 世紀初期に借用)。Цыганенко (1989)によれば, шоссе は 19 世紀にフランス語 *chaussée* から借用された (Vasmer によればまたドイツ語 *Chaussée* から)。Odel (2011)によれば, метро は 1910 年代にフランス語 *métro* から、また пальто は 19 世紀中葉にフランス語 *paletot* から借用された。Черных (1993)によれば, кафе は西欧語から 19 世紀 40 年代に, кино はドイツ語 *Kino* から 20 世紀に, интервью は 19 世紀終わりごろに借用された。меню は 19 世紀中葉から使われ, виски は英語 *whisky* から借用され, 19 世紀の 30 年代から広まった。例外は депо「機関庫」で、この語はフランス語 *dépôt* から借用され, 18 世紀 90 年代から知られている。

今, xCV (x は任意の要素, V は a 以外の母音<sup>16</sup>) の形をした外国の語が借用されるとすれば, そのような語はどのようにロシア語に受け入れられるのであろうか. 上の条件(5)を考慮に入れ, 17 世紀ごろにこういった xCV の形をした外来語を語形変化するとすれば, 上の条件(7)からこれに語尾を直接接続することはできない. この場合には, 何らかの子音を挿入することが考えられよう. 実際には上で検討したように, xCV の後ろに半母音 -j (-й) の要素を付加して, 語根と語尾 V(CV)の母音の連続を回避した. 例えば, gen.sg. ко́фе/ко́фи-j-a, dat.sg. ко́фе/ко́фи-j-u, ... > ко́фея/ко́фия, ко́фею/ко́фию, ... . 単数主格がこの j をもつのは, 恐らく, 他の格形からのパラダイム統一の圧力が働いた結果であろう: nom.sg. ко́фе/ко́фи-j-ø > ко́фей/ко́фий. この段階で語幹は -j を有するものとみなされ, パラダイムは完璧なものとなり, 男性名詞の屈折変化のもとに入った.

また, 外来語が CV (V は a も含めた母音) 語根の場合, この母音 V を語尾として扱うことは上の条件(3)からできない. 従ってこの場合にも, これを語形変化させるときには ко́феの場合と同様に CV の後ろに子音要素を付加したに違いない. チェルヌウイフの仮定するように, 17 世紀ごろロシア語に中国語の ча (ča)「茶」の語が入ってきたとすれば, 語形変化させるために ча (ča)の後ろに -j の要素を付加して, 語根と語尾の母音連続を回避したと考えられる. つまり, gen.sg. ča-j-a, gen./dat.sg. ča-j-u > чая, чаю. この語は čaj- (čaj-)を語幹と見なすことになった. その結果, 単数主格形も чай (< čaj-ø) になったのであろう. そしてロシア語の名詞の曲用パラダイムに組み入れられた<sup>17</sup>.

このように借用された語の語根が母音で終わっている外来語に, -j (-й)の要素をつけた例は他にあるのであろうか. 上で挙げた алой「アロエ」はこの例であろう. その他に次の語は

<sup>16</sup> V が a で, かつ多音節語であるとき, このような語は -a を語尾とみなし, 女性名詞の格変化をする (2.1 で述べたように, この -a が母音によって先行されている語や, また子音に後続されるこの -a がアクセントをもつ語は除く). 例えば, фабрика (fábr'ika): nom.sg. {fábr'ik-a}, gen.sg. {fábr'ik-i}「工場」(18 世紀にラテン語 fabrica より借用). 同様に маска (máska)「面, マスク」(17 世紀にイタリア語 maschera より借用), таблица (tabl'íca)「表」(17 世紀にポーランド語 tablica より借用), 等 (Цыганенко 1989).

<sup>17</sup> ところで, 「茶の葉」を表す чаге が čaje と発音されていたとして, これが末尾の母音を失い, чай になったと考えることは可能であろうか. ко́фе が ко́фей として受け入れた例を参考にすれば, この場合にも čaje に -j の要素が付加され, čaje-j > чайей となるのではなかろうか. しかし чайей の語は, *Словарь академии российской 1789-1794* (『ロシア・アカデミー辞典 1789-1794』) を含めた主要な辞書のなかに見つけ出すことはできない. また私が調べた限りでは, 主要な辞典において чаге, чае の語も記載されていない. 上掲の辞書では чай は「茶の葉」と「(飲み物の)茶」の 2 つの意味をもっている (現代語も同様). 恐らく, 17 世紀以後にロシアにおける喫茶の習慣が確立されるに伴い, чай (< ча) は本来「(飲み物の)茶」しか表さなかったが (1.2 のチェルヌウイフの見解を参照), これが「茶の葉」も表すようになり, чаге (あるいは чае) は消えていったと思われる. というのもこれら 2 つの意味のうちで, 日常生活のなかで「(飲み物の)茶」の意味はその主要な意味であったと考えられるからである. それは, プーシキンの чай の「(飲み物の)茶」と「茶の葉」の使用回数がそれぞれ 41:1 (『プーシキンの言語辞典』) であることから分かる. čaje の末尾の母音を失ったと考える積極的な理由を私は見つけることができない.

そのような形成過程を経てロシア語のなかに定着したものと考えられる：герой (g'erój)「英雄」, музей (muz'ėj)「博物館」, лицей (l'icėj)「リツエイ(貴族学校)」, бугай (bugáj)「種牛」, юбилей (jub'ilėj)「記念日」, трофей (trof'ėj)「戦利品」, тупей (tup'ėj)「オールバックの髪型」, мавзолей (mavzol'ėj)「廟」<sup>18</sup>. これら全て男性名詞として語形変化する。チェルヌウイフとファスマーの語源辞典, 及び他の語源辞典によってこれらの語の語源とその歴史を簡単に記す(特に指示がないものはチェルヌウイフの語源辞典の説明である)。

**герой.** ロシア語のこの語は 18 世紀最初から知られていたが, 初めは ирой (iroj) の形であった(1704). 比較せよ: 仏 héros; 独 Heros; 英 hero; 伊 eróe; 西 héroe. 本源は希 ἥρως. ここから羅 hērōs を経て, 仏 héros を通じて借用(ファスマーも仏語から借用)。

【ここでチェルヌウイフは本論と関連することで興味深いことを書いている: 「ロシア語の ирой (iroj) : герой (geroj) において, 期待される с (s) (ラテン語のように) の代わりにみられる末尾の й (j) に関して, それは主に女性形の героиня (geroinja) < \*героина (\*geroina) 「女傑」の影響のもとに生じたと見なさねばならない. Cf. 希 ἡρωίνη > 羅 hērōīnē (後に hērōīnā) そこから仏 héroïne.」(Черных 1993:I, 186) このチェルヌウイフの解釈は他の例を見れば分かるように, 辻褄合わせの苦しい説明である. 恐らく, 当時のフランス語は, 現代語と同様に héros は [ero] のように発音されていたであろう(これはロシア語の当初の借用形 ирой (iroj) からも分かる). 本論の議論のように末尾母音 o に j が付加したと考えることができる.】

**музей.** ロシア語ではこの語は 18 世紀の 20 年代から知られている. 辞書(1804)には музей, музеум がある. 西欧諸語から借用. 恐らく, 仏語から. Cf. 仏 musée. 仏語ではまた muséum の形も知られている. Cf. また独 Museum; 英 museum; 蘭 museum; 伊 musèò, 他.

**лицей.** ファスマーによれば, ц の存在から判断すれば, 独 Lyzeum (1783 年から)を経由して借用された. 独語は羅 lyceum, 希 Λύκειον から借用. 【仏 lycée [lise]「リセ, 高校」】

**бугай.** ファスマーによればチュルク諸語から借用. Cf. トルコ語 buya, 古ウズベク語 boya, 古代チュルク語, ウイグル語 buka.

【この語は CVCa の構造をもって借用されている. 上の 2.1 と脚注 16 で述べたように, このような多音節語で -a で終わる外来語は, ロシア語では女性名詞として格変化をするのが普通である(cf. машина, фабрика 等). しかしこの語はこれとは違い, 末尾に-й を付加している. この理由は, この語が「種牛」という意味のため, -a で終わる女性名詞として受け入れることはできないことによる. 従って, この語もまた j の要素を -a の後ろに付加して男性名詞とし, 男性名詞の屈折語尾を取ったのである: nom.sg. бугай (bugaj) < buga-j ← \*būya, gen.sg. бугая (bugaja) {bugaj-a}..】

<sup>18</sup> これ以外に, скарабей (skarabėj)「(昆虫) スカラベ」も考えられるかもしれない. 仏語 scarabée「スカラベ」, ラテン語 scarabaeus 参照.



**юбилей.** ロシア語では юбилей は形容詞の юбилейный とともに 19 世紀初めから記録されている。西欧諸語から借用。Cf. 仏 (14 世紀から) jubilé (j=ж)「50 年記念日」; 形容詞 jubilaire と名詞 jubilaire. 独 Jubiläum, Jubilár; 英 jubilee, 等。ファスマーによればドイツ語 Jubiläum を通じて借用。

**трофей.** ファスマーによればピョートル 1 世の時代から。フランス語の trophée から借用。Цыганенко (1989: 437)の語源辞典によれば、ロシア語では 15 世紀から記録されている。ポーランド語の trofeum あるいはフランス語の trophée を通じて借用。

**тупей.** ファスマーによればフランス語の toupet から借用。

**мавзолей.** ロシア語でこの語 (はじめは恐らく, з の代わりに с をもつ) は, 17 世紀末から知られていた。Cf. 仏 mausolée, 伊 mausolèò, 西 mausoleo, 独 Mausoleum, 英 mausoleum, 他。ロシア語は恐らくフランス語から借用。ファスマーによればドイツ語, フランス語あるいは羅 mausölēum を経由して借用。

### 3.1. ロシア語の末尾要素 j はなにか

ロシア語の末尾要素 j は, 上でも述べたように語根と語尾との母音連続を避けるために語根末に付加された要素であると仮定することができる: gen.sg. κόφε/κόφι-j-a.

ロシア語は語根内部, 語根と接尾辞と語尾の境界では母音連続を避ける。その一例は動詞の構造にも見られる。名詞語根と異なり動詞語根には CV のように母音で終わる語根があるが, その際に V で始まる人称語尾を直接に連続することはできない。この場合も j が母音連続を避けるために使われる。例えば, знать (znat')「知っている」は語根が zna-であり, その現在形は знаю (zna-j-u)「私は知っている」のように 1 人称単数の人称語尾 -u の前に j が挿入されている (cf. учить (učit')「教える」, pres.sg.1. учу (uč-u), 語根は uč). これらの例は j の 1 つの機能であるが, ロシア語には音節形成の機能としても j を使う場合がある。ロシア語本来の (あるいはスラヴ祖語由来の) a-で始まる語はこの j を a-に前置させた。例えば, яблоко (jábloko)「リンゴ」(< PS1. \*ablъko < \*āblu-. Cf. PIE \*h<sub>2</sub>eb-ōl-, \*h<sub>2</sub>eb-l-, 独 Apfel, 蘭 appel), ягнёнок (jagn'ónok)「子羊」(ORuss. jagnę < PS1. \*agnę. Cf. PIE \*h<sub>2</sub>eg<sup>w</sup>-n-, 希 ἀμνός, 羅 agnus「子羊」), ягода (jágoda)「ベリー, 漿果」(< PS1. \*ag-oda < \*aga. Cf. PIE \*h<sub>2</sub>og-eh<sub>2</sub>?, リトアニア語 úoga < \*ōga「イチゴ類」). この結果, 現代ロシア語の a-で始まる語は一部の間投詞を除き近代にロシア語に入った外来語起源の語である (例えば, автор (ávtor)「著者」(17 世紀), академия (akad'éniija)「アカデミー」(17 世紀), акробат (akrobát)「軽業師」(18 世紀), алгебра (álgebra)「代数学」(17 世紀), аптека (apt'éka)「薬局」(16 世紀), аудитория (aud'itór'iija)「講義室」(18 世紀), 等)。このような CV-を形成するために使われる j- は, 本論で検討した末尾要素 j と無関係ではない。どちらも音節形成の機能を果たしているからである。

ロシア語の母音連続を避けるという特徴を Garde (1972: 372-387 [Garde 2006: 38-48], 『ロシア語文法』 p. 138)は共時的なロシア語の特徴として次のように書いている:

構造化された同一語（語根＋接尾辞＋語尾）の2つの形態素の境界には母音連続 (hiatus) が存在できない。もし母音で終わる形態素が母音（移動母音#を含む）で始まる形態素によって後続されるならば、子音 /j/ が2つの母音の間に挿入される。

本論は、このギャルドの共時的な定式を歴史的に外来語のロシア語化の過程のなかで検討したということである。ギャルドによれば、この /j/ は母音とゼロ形態素の間にも挿入される、と述べている。例えば、動詞語根 /zna/「知っている」と命令形のゼロ語尾  $\emptyset$  との間に /j/ が挿入される：zna-j- $\emptyset$  > знай「知りなさい」。しかしこの定式は共時論的な変形規則としてもかなり強引なものであり、ゼロ語尾の前でなぜ j が出現するのかという形態音韻的な説明を与えることはできない。これを上で述べたように、кофей / кофий の単数主格形の-й (-j)を他の格形からのパラダイムの統一の圧力によって生じた結果であるとすれば、合理的な説明を与えることができる。別言すれば、語幹の統一によるゼロ語尾前の -j の挿入である。命令形 знай (znaj) の場合も同様に、現在時制形での他の活用変化形（例えば、pres. sg.1. zna-j-u, sg.2. zna-j-eš, pl.3. zna-j-ut, 等）による現在語幹の統一の圧力によるものと説明できよう。

### 3.2. セルボ・クロアチア語の外来語の曲用と比較したロシア語の外来語の不変化

ロシア語における中性名詞の外来語を不変化にする傾向は、上で述べたように 19 世紀後半から生じたものである。これがなぜロシア語において生じたのかについては、ここで取り扱うことのできない大きなテーマである。ここでは補遺として、ロシア語以外の他のスラヴ諸語とロシア語の外来語の屈折変化を比較することで、スラヴ諸語内での外来語に対する取り扱いの特徴を一瞥してみよう。これは外来語だけではないロシア語の変化傾向を知る一助になるからである。

現代ロシア語は中性名詞の外来語を不変化にするが、これと全く逆に全ての外来語を変化させる言語もある。セルボ・クロアチア語がそれであり、例えば、-ō で終わる外来語：birō ‘bureau, office’ *m.* の単数属格は birò (cf. Russ. бюро は不変化)；-ē で終わる外来語：kùpē ‘compartment’ *m.* の単数属格は kupè (cf. Russ. купе は不変化)；-ī で終わる外来語：mènī ‘menu’ *m.* の単数属格は meni (cf. Russ. меню は不変化)；-ū で終わる外来語：intèrvjū ‘interview’ *m.* の単数属格は intervju (cf. Russ. интервью は不変化)。セルボ・クロアチア語のこのタイプの外来語は生産的であり、次の特徴をもっている：1. 男性名詞。2. 単数主格で語末音節に延長母音をもつ。3. 単数主格で次末音節に短上昇音調(´)を、単数斜格で語尾前に短上昇音調をもつ<sup>19</sup>。さらに短母音 -i, -u, -o, (-e) で終わる外来語がこれに加わる：täksi ‘taxi’, *m.* の単数属格は täksija (cf. Russ. такси 不変化), vīski ‘whiskey’, *m.* の単数属格は vīskija (Russ. виски 不変化), dōmino ‘domino’ *m.* の単数属格は dōmina (cf. Russ. домино 不変化), pīkolo ‘piccolo’ *m.* の単数属格は pīkola (cf. Russ. пикколо 不変化), kēnguru ‘kangaroo’ *m.* の単数属格は kēngurua (cf. Russ. кенгуру 不変化)。ここで興味深いことに気づく。セルボ・クロアチア語においてこれらの外来語は男性名詞扱いされ、短音の -o で終わる名詞を除き(これは男性名詞にも拘わらず、

<sup>19</sup> これに対してロシア語は中性名詞であり、多くは語末にアクセントをもつ。

中性名詞と同じ曲用タイプをとる), 男性名詞の曲用を採用し, いずれも語幹として単数主格の形を保持する (語幹末音節の短縮を伴う): nom. sg. birō-ø, gen.sg. birō-a, dat./loc.ag. birō-u, instr.sg. birō-om. また, -ī, -i で終わる語は語根と語尾の間に j を挿入する. これは上でみた 18 世紀のロシア語の кофий, кофей と同じ外来語を受け入れる方法である. その他の母音で終わる語は直接に母音で始まる語尾を付けることができ, 母音連続を許す<sup>20</sup>.

ロシア語の中性名詞の外来語の不変性についてイサチェンコ Исаченко (1954: 225) は次のように書いている:

文章語に入った -o あるいは -e で終わる外来語は中性名詞の屈折変化には加わらない. それらは不変性名詞のグループをつくる (пальто, панно, кафе, шоссе, ателье). 外来起源の語幹を中性のパラダイムに同化させることができないのは, 中性の一般的な意味論的不明確さと形態的な《不活発さ》とに関連している. ヴィノグラードフ (Виноградов:1947:82) が正しく指摘しているように, 「中性の表現方法は相対的に貧弱である. 中性の語クラスのメンバーは次第に減少してきたし, また今も減少を続けている。」

他方, セルボ・クロアチア語は母音で終わる外来語を男性名詞として曲用に組み入れることで全ての外来語を屈折変化させる. このような両言語にみられる外来語に対する異なる取り扱い, 他の形態的特徴とともに考察すると次のような各言語の「駆流(drift)—Sapir」の一つの顕れとみなす根拠がある: ロシア語における分析主義(анализм)の伸張<sup>21</sup>, 他方, セルボ・クロアチア語における反分析主義, あるいは伝統主義の保持である.

## 謝辞

\*本研究は JSPS 科研費 18K00571 の助成を受けたものです.

## 参考文献

<sup>20</sup> セルボ・クロアチア語は, 周知のように, l~o の交代のために語根内部でも母音連続を許すこともこれと関連している. 例えば, kòtao (< kòtal) ‘boiler’, gen.sg. kòtla, cf. Russ. котёл, котла. (kòtao の a はセルボ・クロアチア語の移動母音.)

<sup>21</sup> 現代ロシア語 (特に口語) において分析主義は様々な面に見られる. このよく知られている一側面は, 格変化する語を無変化にする傾向である. 例えば, 合成数詞は, 80 年版アカデミーの『ロシア語文法』(I. 579)では全ての語を語形変化させるとしている. しかし口語では最初の要素だけ, あるいは最後の要素だけを格変化させる: с двумя тысячами *триста пятьдесят* двумя бойцами 「2,352 人の戦士とともに」(イタリック部「350」は主格のまま, その他の数詞は具格を要求する前置詞 с の下で具格に格変化している). 分析主義の他の側面に関して, 伝統的な質的な子音交替に代わって, 口語で子音の硬軟のペアによる子音交替が生じている. 例えば, жечь 「燃やす」の現在変化: жгу, жжѣшь, жжѣт... における規範的・標準的な г ~ ж の交替に代わって, жгу, жгѣшь, жгѣт... における口語的な г ~ г' の交替への変化. これについて Земская (1983 100)は, 「(この伝統的な交替の弱化は) 膠着性の方角への言語発達を反映したものであるが, しかしその弱化は分析主義の伸張を促す現象とみなすことができる. というのもこの場合に, その動きはコンテクストの影響下で交替しない, 変種化されることのない, 安定した単位側に向けられているからである。」と書いている.

- Derksen R. (2008) *Etymological Dictionary of the Slavic Inherited Lexicon*. Leiden·Boston: Brill.
- Garde P. (1972) «La distribution de l'hiatus et le statut du morphème /j/ dans le mot russe». *The Slavic word*, La Naye, Mouton. pp. 372-387. [Garde (2006: 38-48)]
- Garde P. (1981) «Les trois systèmes morphologiques du russe». *Slavica*, 17, Debrecen, 39-58. [Garde (2006: 65-82)]
- Garde P. (1998<sup>2</sup>) *Grammaire russe. Phonologie et Morphologie*. Paris: Institut d'études slaves.
- [ポール・ギャルド著, 柳沢民雄訳『ロシア語文法 音韻論と形態論』ひつじ書房 2017]
- Garde P. (2006) *Le mot, l'accent, la phrase. Études de linguistique slave et générale*. Paris: Institut d'études slaves.
- Lokotsch K. (1927) *Etymologisches Wörterbuch der europäischen (germanischen, romanischen und slavischen) Wörter orientalischen Ursprungs*. Heidelberg: Carl Winter.
- Orel V. (2011) *Russian Etymological Dictionary*. Vol. 1-4. Theophania Publishing.
- Skok P. (1971-1974) *Etimologijski rječnik hrvatskoga ili srpskoga jezika*. 1-4. Zagreb.
- Vasmer M. (1950-1958) *Russisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter.
- АН СССР *Словарь языка Пушкина*. 1-4. Москва. 1956-1961.
- АН СССР *Русская грамматика*. Том I. Москва. 1980.
- Булаховский Л. А. (1954) *Русский литературный язык первой половины XIX века*. Москва.
- Виноградов В. В. (1947) *Русский язык (грамматическое учение о слове)*. Москва-Ленинград.
- Даль В. (1912) *Толковый словарь живого великорусского языка*. 4-е издание под редакцией И. А. Бодуана-де-Куртенэ. СПб.-Москва.
- Зализняк А. А. (2010<sup>6</sup>) *Грамматический словарь русского языка: Словоизменение*. 6-е издание. Москва.
- Земская Е. А. (1983) *Русская разговорная речь. Фонетика. Морфология. Лексика. Жест*. Москва.
- Исаченко А. В. (1954) *Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким. Морфология*. 1. Братислава.
- Мураяма С. (1977) «Этимология русского слова чай». *Этимология 1975*. стр. 81-83. Москва: «Наука».
- Ожегов С. И. и Шведова Н. Ю. (2009<sup>4</sup>) *Толковый словарь русского языка*. Москва.
- Преображенский А. Г. (1910-1914, 1949) *Этимологический словарь русского языка*. 1-2. Москва.
- Словарь академии российской 1789-1794*. 1-6. Москва. 2002.
- Словарь церковно-славянского и русского языка*. Второе издание. СПб. 1867.
- Ушаков Д. Д. (ред.) (1935-1940) *Толковый словарь русского языка*. 1-4. Москва.
- Фасмер М. (1986-1987) *Этимологический словарь русского языка*. 1-4. Москва.
- Цыганенко Г. П. (1989<sup>2</sup>) *Этимологический словарь русского языка*. 2-е издание. Киев.
- Черных П. Я. (1953) *Язык уложения 1649 года*. Москва.
- Черных П. Я. (1993) *Историко-этимологический словарь современного русского языка*. 1-2. Москва.
- 村山七郎 (1975) 「茶」をあらわすロシア語の語源『窓 '75. 3』pp. 34-35. ナウカ.

執筆者紹介

氏名：柳沢民雄

所属：名古屋大学名誉教授

北海道言語文化研究  
No. 18, 155-175, 2020.

北海道言語研究会

Email : itabup53@me.com